地域の産業と生活を支える福井港

PORT OF FUKUI

福井港は、昭和46年に重要港湾に指定され、福井平野を流れる一級河川･九頭竜川の南に広がる三里浜丘陵を掘り込んで築造されました。

平成12年には、重要港湾から地方港湾に格付け変更されましたが、同年、地域の振興に重要な役割を果たすことが期待される港湾として、「特定地域振興重要港湾」に選定され、平成17年4月に関税法上の開港指定、無線検疫対象港の指定をそれぞれ受けています。

現在は、県内最大の工業団地「テクノポート福井」の要となる工業港として、また地域物流の重要な拠点として、地域の産業と生活を支えるために、港湾利用者のニーズに対応した様々な取り組みを進めています。

福井港シンボルマーク

すがすがしい福井港の空と日本海をイメージしたブルーに、「ボラード（係船柱）」と「かもめ」を配置し、イニシャルの「F」を表現しています。伸びやかな楕円形は、右上がりに飛躍する未来を象徴しています。

福井港の沿革

福井港は、福井平野を流れる九頭竜川の河口部に位置しています。
昭和46年3月に三国港から名称変更し、福井港となりました。
福井港は、本港地区と三国港地区からなっています。

三国港地区

三国港は古くからの港であり、光仁天皇の宝亀9年（778年）に送高麗使高麗朝臣殿嗣が渤海使張仙寿らとともに三国湊に来着したとの記録が『続日本紀』に見られます。以降、対岸諸国との交易、穀倉地帯･越前加賀の穀物の積出港として栄え、江戸時代には北前船の出入りする「北国7大湊」として繁栄しました。

明治に入ると、オランダ人技師エッセル氏の計画･設計により、西洋技術を取り入れた我が国最初の港湾工事として、捨て石防波堤工事が行われ、日本郵船が就航しました。しかし、明治30年北陸線が開通し、鉄道の発達により、物資の輸送が船運から陸運に移行し、三国港は、衰退の一途をたどりました。

その後、河口港の運命たる堆積土砂を取り除く航路浚渫を行い、1000トン級船舶が出入りできることとなり、石炭の陸揚げなど取扱貨物量は増加し、大正11年には、指定港湾となりました。戦後は、福井地震などの被害を乗り越えて、戦前を凌ぐ発展を見ました。

現在では、「越前がに」をはじめとする漁業の本拠地として、また海洋性レクリエーションエリアとして平成17年4月に福井港九頭竜川ボートパークが供用開始しました。

三国港地区　「越前がに」のせり市

本港地区

県では、繊維産業を主力とする内陸工業に加えて、付加価値の高い基幹産業の導入により産業構造の変換と県民所得の向上を図るために、昭和44年、九頭竜川左岸に広がる広大な三里浜に「福井臨海工業地帯」の造成と、その核となる大型船舶の出入りが可能な掘込み港湾の建設を計画し、昭和47年に着手し、昭和53年には一部を供用開始しました。

現在では、国家石油備蓄基地や石油配分基地が立地するエネルギー基地として、また「テクノポート福井」の拠点港として、さらには福井県嶺北地域を中心とした背後圏の物流基地としての機能を果たしています。

本港地区